

国境の越え方

柳原 孝敦

はじめに

カレン・カブランが言うように、移動（亡命、旅など）が近代の比喩として機能し、さらにはモダンの様々な変種としてのポストモダニティの様態をも肯定しているのなら〔カブラン 2003: 49; 77〕、亡命や単なる旅ではない移動は近代以外の比喩たりうるだろうか？あるいは、モダニティやポストモダンの概念を強化するものとして持ち出されてきた従来の旅の理論が考慮に入れなかった類の移動は、果たして新しい時代や新しい時代概念に対応するのだろうか？これがこのささやかな研究ノートの出発点である。ここに言う「新しい時代概念」とは、たとえば、「グローバル化」、「グローバリズム」のことである。

というのも私は、かつて、ラテンアメリカ文学における詩の潮流モデルニスモは、言うところのモダニズムに他ならず、その典型的にモダニズム的な精神が「ラテンアメリカ」という概念と呼称を定着させるのに一役買ったのだと主張した〔柳原 2007: 特に第2章〕からである。そのとき私は、ラテンアメリカで進行しつつある市場のブロック化の後に、ラテンアメリカが文化的にひとつにまとまった共同体であるという主張（ラテンアメリカ主義）がどのような変質を被るのかを見極めることを今後の課題として残した。それに対する応答、あるいは少なくともその一部となるべきものを私はまだ見出していないが、少なくとも近年の文学作品に描かれる移動は、私が以前扱ってきた作家や詩人たちの移動（亡命や外交官としての異動）とは異なるもののように思われる。それがグローバル化の時代の問題点に呼応しているようにも思われるので、ここで少し整理してみたいと思った次第だ。

ここではとりわけ、米墨国境の越え方に焦点を絞って見ていこう。

1 やすやすと国境を越える人々 アルベルト・フゲー『ミッシング』

1-1 アルベルト・フゲーについて

アルベルト・フゲーに注目するのは、彼がチリの作家であり、同時に反マジックリアリズム、

反ガルシア=マルケスの文学のマニフェストとも言うべき『マッコンド』 *McOndo* 序文を書き、それを編纂した人物だからである。言うまでもなくチリはグローバル化の時代の出発点であり、「ガルシア=マルケスのマジックリアリズム」に反旗を翻すとは、とりもなおさず〈ブーム〉と騒がれたラテンアメリカ文学の時代に別れを告げ、新たな時代の始まりを宣言する行為だからである。新たな時代とは、ひょっとしたら、グローバル化に対応するものだからである。

グローバル化が（少なくともその一面が）新自由主義経済による市場の画一化と見なせるならば、1973年のクーデタ後、いち早くミルトン・フリードマンの弟子たちのいわゆるシカゴ学派の者たちを登用して、新自由主義的経済政策を実行に移したチリは、グローバル化の始点とみなして差し支えない。たとえば中山智香子は新自由主義の世界的な拡がりを検証するのに、チリの事例から始めている〔中山 2013: 27-71〕。このチリにおける新自由主義の導入は、ナオミ・クラインが「ショック・ドクトリン」と呼んだ暴力的な仕方によってであったこと、すなわちピノチェトのクーデタとそれに続く大粛正とに乗じてであったことは〔クライン 2011 上: 67-180〕、記憶しておいてよい。

そんなピノチェト政権下で育ったフゲーは、1996年、セルヒオ・ゴメスとともに、1960年代生まれを中心とした作家たちの短編アンソロジー『マッコンド』を編纂し、同じくゴメスとの連名でそこに「マッコンド国の紹介」という前書きを添えた。短編集のタイトルからもわかるように、これはガルシア=マルケス『百年の孤独』の舞台マコンド *Macondo* のパロディである。前書きは、我々のはもはやマコンドを舞台にした絶世の美女が昇天するような小説は書けない、という彼らの世代のマニフェストである。彼らが小説世界に展開すべきマッコンド国とは、以下のようなものだという。

我々のマッコンド国はもっと大きく、人口過多で、大気汚染だらけで、自動車道や地下鉄、ケーブルTVが整備されており、スラム街がある。マッコンドにはマクドナルドが、マックのコンピュータがある。マネーロンダリングで建てられた五つ星ホテルや巨大ショッピングモールに加えての話だ。マッコンドでは、マコンドでと同様、何でもありだが、もちろん、我々の国では人が空を飛ぶとすれば、それは飛行機に乗るからであるし、でなければドラッグをやっているからだ。〔Fuguet y Gómez 1996: 15〕

貧富の差が明確に見て取れるスラム街を含む大都市にグローバル資本による商業施設や商品、国境を越えるメディアを当然の前提とするマッコンドは、20戸ばかりの小屋からなる共同体として始まったマコンドとは大違いである。フゲーとゴメスはすっかりグローバル化されてしまった世界中のどこの中心都市でもありうる都市こそが我々の住む世界だと規定したのだ。

1-2 『ミッシング』のカルロス・フゲーの場合

そんなフゲーがグローバル化の始点とも言うべき1973年9月11日の出来事を示唆するタイトルの小説を発表したとなれば、私たちの興味を惹かないわけにはいかない。2011年発表の小説『ミッシング』[Fuguet 2011]のタイトルは、小説内でも言及され、主人公=語り手が観ることにもなるコスタ=ガヴラスの映画『ミッシング』[アメリカ、1982]から取ったタイトルであり、映画『ミッシング』とは、チリのクーデタ直後、行方不明者 missing となったアメリカ人ジャーナリストを探す父の話だ。

ただし、フゲーの小説『ミッシング』のストーリーはこの映画のそれにひねりを加え、反転させたものになっている。オートフィクションの体裁を採り、作家と同名の人物を主人公兼語り手としたこの小説では、主人公アルベルト・フゲーがアメリカ合衆国で1980年代に行方不明になった叔父カルロスを探すというのが、前半部の中心的なストーリーである。親が子を探すのではなく、甥が叔父を探す。しかも叔父が行方不明になるのはクーデタ後の肅正の嵐吹き荒れるチリなどではなく（ピノチェト時代のチリが行方不明者 *desaparecido* は、ここ数十年、チリや同様の境遇にあったアルゼンチンでの文学や映画における最大のオブセッションのひとつだ）、レーガノミクス（とは新自由主義の一変種にほかならない）の行き渡ったアメリカ合衆国でのことだ。アルベルトによれば、その叔父の失踪は、アメリカ合衆国内での出来事であることに大いに関係している。

国を変え生活を変えた人たちは皆、自分自身に問う。もとの場所にいたら、こんなことにはならなかったのじゃないのか？ チリにいたままだったらカルロス・フゲーの身にはどんなことが起こっていたのだろうか？ 最終的には教師になったのだろうか？ それともゲリラ戦士？ ピノチェトの軍隊の手で消されていたのだろうか？

甥としての僕の説は、合衆国が叔父をだめにしたというものだ。ひょっとしたらそれは不当かもしれない。言いがかりもいいところだ。けれどもアメリカという要素は等式に関係するものだ。大いに、ひょっとしたら過度に関係する。僕だって居場所を変えた者については少しは知っている。[31 傍点は原文のイタリック]

では、カルロス・フゲーはいかにしてアメリカ合衆国に渡ったか？ 移住は作家アルベルト・フゲーの生年と同じ1964年のことであった。

祖父はヌエバ・ニューオーア通り（現在のイスラエル共和国通り）の家を売るはめになった。あるいは剝奪されたのかもしれない。ともかく、家族四人は人の密集する七月十日通りの小さなアパートに移った。自動車とその部品の製造工場のある地区だ。贅沢な暮らしは終わりを告げた。祖父はタク

シーの運転手をし、祖母は針子になった。カリフォルニアにいた父はもう結婚していて子どもの僕も生まれていたが、移民の手續きに乗り出した。当時、合衆国に入るのにそれほどの苦労は要らなかった。祖父はまず二人の息子を先にやり、彼らが腰を落ち着けたのを確認してから後に続こうと決めた。十九歳にしてフゲ一家二男は英語のひと言もしゃべれないままロサンジェルス空港に降り立った。弟も一緒だった。二人のうちどちらもそれまで「外」へ出たことはなかった。フォレスト公園の向かいにある大使館で、共産黨員だったこともないし、フィデル・カストロを崇めてもいないと宣言していた。ひとつの嘘から出た二つの嘘だ。それからまた、父親に見守られながら、戦時には新たな自分の国を守る覚悟であるとの書類にもサインした。〔30〕

いたって簡単なものである。国境を越えるには苦労は要らなかった。唯一障壁らしいことといえば、共産主義者かどうか、その判定にかかってくる。実はカルロスが師範学校で共産主義にかぶれもしたのだが、そんなことはなかったかのように振る舞えばよかった。

2 地を這う人々

空路国境を越える者は幸いだ。少なくとも国境越えの瞬間に障壁は立ち塞がらない。入管やビザ発給の際の大使館など、国境を越える前、および越えた後にいささかの困難が待ち受けているくらいなものだ。これが陸路となるとそうはいかない。陸路国境を越えようとする者は立ち塞がる高いフェンスに行く手を阻まれるかもしれない。巨大な河に飲み込まれてしまうかもしれない。ちょうどメキシコと合衆国の国境のように。

2-1 米墨国境に向かう労働者たち

米墨戦争だのテキサス・レンジャーズだのといった 19 世紀の昔にまで話を戻すまい。1980 年代からとりわけ不法移民と米墨国境の問題が焦点化されるようになったのは、中米諸国の内戦も関係していたかもしれない。しかし、この時期が世界的な新自由主義経済の導入時期と重なることも、間違いない。たとえばメキシコ南部チアパス州の先住民が合衆国を目指すのは、新自由主義経済の導入、NAFTA（北米自由貿易協定）締結を経て経験した農業、とりわけトウモロコシ農業の破綻が大きな要因だという〔清水 2013: 217-218〕。

フィクションではないけれども、ここで名前を挙げたついでに清水の紹介する例を挙げておこう。というのも、それが実に示唆的だからだ。オーラル・ヒストリーの視点からメキシコ南部チアパス州チャムーラのフィールドワークを続ける清水は、かつて、この地のマヤ系先住民の聞き取りからなる古典的民族誌リカルド・ポサス『ファン・ペレス・ホローテ』を翻訳し、

そこに、自ら行ったフアンの息子ロレンソへのインタビューに基づく個人史を加えて一冊の本として出版した〔ボサス／清水 1984〕。今彼が追うのは、さらにそのロレンソの孫フアニートの物語なのだった（ロレンソの子、つまりフアニートの父親は早く死んだようだ）。自身が論文ではなく「作品」と呼ぶこの文章〔2013〕は、そうした過去の「作品」に続けて読むと、もはや一編の長編小説の体をなしているようですらある。

フアニートの三代前、すなわちフアン・ペレス・ホローテはメキシコ革命の時代に翻弄されるように国内を移動するはめになった。その息子ロレンソの語りは、もはや移動ではなく共同体内の変化に焦点が当てられていた。そして今、フアニートは曾祖父のように共同体を飛び出し、曾祖父の到達したサカテカスの街よりはるか向こう、国境を越えてアトランタへ、そしてニューヨークまで旅をしたのだという。共同体内での立場の問題も原因の一端ではあったけれども、主に職を求めてのことだ。

チアバスの住民が国境を目指す場合、さらにその南、グアテマラ以南の中米からの越境者と合流することが多いようだ。「野獣」(The Beast)、あるいは「死の列車」(The Train of Death) と呼ばれる貨物列車の屋根に隠れて越境する例は今も後を絶たない〔清水 2013:235〕。そう
で、こうした指摘は、キャリー・ジョージ・フクナガの映画『闇の列車、光の旅』〔アメリカ、メキシコ、2009〕を強く想起させる。映画は貨物列車の屋根での移動に加え、マラ・サルバトゥルーチャという、合衆国に移民後ギャング化し、中米に戻って勢力を拡大した一群の青少年を扱って衝撃的だった。が、今、清水が語るのは、こうして米墨国境を目指す者たちのうち、中米からの者たちは、既にメキシコの国境を違法に越えているのであるから、途中、様々な検問にかけられ、脱落する者も多いという事実だ。語られたフアニートの旅の背後には、多くの挫折と苦難の物語が控えているようだ。

フアニートはメキシコ人なので、合衆国との国境にはすんなり到着したようだ。が、何と言っても過酷なのは、やはり米墨国境と、その前後に広がる広大な砂漠越えであるらしい。砂漠越えは「コヨーテ」とか「ポジェーロ」と呼ばれる案内人に導かれてなされる。清水は「ポジェーロ」の語を採用している。ひとりのポジェーロに数人の不法移民が付き従って進むという。

砂漠には月明かりに照らされて不気味に光る鉄条網が二重、三重に張りめぐらされている。すこしでも引っつかれば、すかさず警報のサイレンが鳴り出す。しかしポジェーロはルートだけでなく、鉄条網の越え方もよく心得ていた。引っ張らないようにして、そっと越えるのだ。鉄条網をうまく越えても、その先はヘリコプターによる国境警備の監視の目が光っている。砂漠の夜はぐっと冷えこむ。煌々と照る月明かりだけが頼りだが、見つかる危険も避けられない。しかし昼間はもっと危険だ。歩くのは原則、夜にかぎる。だが、監視がゆるいと思えば昼間でも歩く。昼も夜も身体をすっぽり覆えるほどの木の枝を担いで、ヘリコプターの音が聞こえたら、すかさずその枝で身を隠すのだ。

この後、フアニートの言葉をそのまま引用して、清水は砂漠越えの過酷さを伝えている。砂漠越えをトラックの荷台に「いわしの缶詰」のようにぎゅうぎゅう詰めに詰められて行く者もいるらしい。フアニートの義理の弟ロセンドが、そういう経験をしたようだ〔224〕。フアニートの場合、アリゾナ州フェニックスでいったん徒歩での砂漠越えを終え、就労先のジョージア州アトランタまでの移動の際に、「いわしの缶詰」になった。

「フェニックスからは、ミニ・バンの車に乗せられて、午後二時くらいに出発した。一台に二〇人くらい押し込められた。僕が乗ると床に寝ろって言われたんだ。座席に座れたのは四人だけで、残り全員が折り重なって床に寝かされた。一番下は何とも苦しい。下からは車の振動、上からは仲間の体重。息をするのも苦しいくらいだ。フェニックスからアトランタまでずっとだ。全員にペットボトルが渡されて、小便がしたくなったらそれで済ませる。その間、ほとんど食いはもらえない。とにかく空腹つづきで、腹ぺこだと訴えても、返ってくるのは怒鳴り声だけだ。運がいいことに検問にあったのは一回だけ、しかも入管じゃなく、警官だった。スピードを出してたんで停められたが、グアテマラ人のポジェーロは英語が上手かったし、やり取りもお手のもんで、警官とうまく交渉してくれた。みんな働くために来たんだ、盗みや麻薬とは関係ない。そう言うと警官はそのまま立ち去ってくれた。アトランタに着くまで丸三日、空腹と寝不足そして身体の痛みで、何人も気を失った。砂漠越えよりはましだったけど、七二時間寝たきりの旅だ。」〔247-248〕

フアニートの従兄弟の友人アグスティン・ゴメスは、トラックの荷台で、その「下に箱があって、その中で寝たまま隠れて運ばれた」〔249〕のだそうだ。年々厳しくなる国境地帯の監視の目を潜り抜けるために、越境者たちはますますの困難を強いられていることがわかる。

2-2 ホルヘ・フランコ『パライス・トラベル』の場合

清水の記述する現実の越境者たちの困難は、その一部は映画『闇の列車、光の旅』を想起させたが、本当にメキシコ人であるかどうかの検問の存在、国境の砂漠越えの困難などの点でも別のあるフィクションを想起させないではいられない。ホルヘ・フランコの『パライス・トラベル』〔フランコ 2012／原書は 2002〕だ。これはこれで、映画化もされているのだが〔シモン・ブランド監督、コロンビア、2008：日本未公開〕。砂漠越えの場面は、もちろん、フランコ自身が脚本を書いた映画でも再現されている。

語り手＝主人公のマーロンが、合衆国で一旗揚げたいと考える恋人のレイナに説得されて、

越境専門の旅行代理店ハライソ・トラベルに多額の準備金を払い、合衆国に渡った方がいいが、そこでレイナとはぐれ、彼女を捜すというストーリーだ。ニューヨークでコロンビア料理のレストランに職を見出し、そこで仲良くなった友人や新たな恋人候補ミラグロス、レイナの居場所を突き止めて会いに行く途中のバスで隣に座った女性などに対し、マーロンが語って聞かせるという体裁を採っている。

マーロンとレイナはトラックの荷台に積んであった丸太（中がくりぬいてある）の中に隠れて砂漠を越えたのだという。マーロンはミラグロスにそう語る。

トラックの後方から見ると、丸太はチーズのように見えた。ずいぶん深い穴で、おそらくそこに僕たちは潜り込まなければならぬのだろう。墓場の壁龕に入り込むようなものだ。うつぶせに葬られるかのように一人が横たわってきちきちくらの穴だ。

ミラグロスが脚を僕の両脚の間に入れてきて額を僕の肩にくっつけた。

僕は話をつづけた。もちろん僕たちは抗議したが、それまでと同じように何の役にも立たなかった。僕たちは総勢八名だったが、その半分はもう泣き出していた。その後全員が泣きそうになった。というも、乗り込む前に金を払ってほしいとコヨーテが言ったからだ。国境で僕たちがもし捕えられたら、いくらか握らせなければならない、と彼は言った。

「いくら？」と僕たちは尋ねた。

「この帽子がいっぱいになるまで」とデカ頭用の帽子を僕たちの前に差し出しながら、金歯の男が言った。

[中略]

レイナが最初に行動を起こした。よじ登って、あてがわれた穴に小さなイモリが隠れるように入り込んでいった。

コヨーテは懐中電灯で彼女を照らしたが、僕が最後に見たのは彼女の靴の底だった。それから奴らはもっと短い丸太に上って墓石でも置くように穴に蓋をした。そこに足りないのは花と僕たちのために泣いてくれる親族だけだった。

僕は彼女の近くにいたいと思った。奴らに上ると伝えて、彼女が入ったすぐ下にあった穴を選んだ。僕は暗いトンネルに滑り込んで身を潜ませたが、積荷が崩れ落ちることがないのかを聞くために戻ろうと決心した。後ずさりしようとしたら、すでに別の丸太で塞がれてしまっていた。そのまま僕はもう一本の丸太になっていた。 [251-253]

フィクションといえども、ある種の記述は取材や資料探索に基づくはずだ。フランコはこの国境越えの話インタビューや資料などから得た情報を利用して書いたのだろう。参照元を突き止めるにはいたっていないものの、清水の描写との類似と差異は、日々繰り返される越境の現実と、それを題材にした小説の本質的な差を伝えているようでもある。現実とフィクション

の差というだけでなく、あるひとつの事象をめぐる情報の広まりかた、利用のされかたについてもなにがしか教えてくれるようである。

3 再び空路について バスケス『物体の落下する音』

コロンビアのファン・ガブリエル・バスケスが2011年に発表した小説『物体の落下する音』[Vásquez 2011]はコロンビアの麻薬密売の始まりの時期と、最大の麻薬マフィアのボス、パブロ・エスコバルの死後、問題も収束したかに見える現在とを結びつける小説だ。

若くして大学の法学部で教鞭を執り、順風満帆な人生を送る主人公=語り手のアントニオ・ヤンマーラが、ビリヤード場で知り合った元パイロットのリカルド・ラベルデの半生を辿るという内容だ。というのもアントニオは、リカルドが何者かに襲撃されて殺されたその場に居合わせ、自らも心身共に深い傷を負ってしまったからだ。回復のためにはなぜ襲撃されねばならなかったのかを突き止める必要があると思い立ち、死の直前にリカルドが聞いていたカセットテープについて調べることから始める。リカルドは以前、妻がアメリカ合衆国から会いに来るのだと言っていたことがあったのだが、実はその妻の乗った飛行機は墜落事故を起こしていた。リカルドはそのブラックボックス内の記録を聞いていたのだ。これを手がかりにリカルドのひとり娘にたどり着いたアントニオは、彼女の家にある昔の手紙や彼女の話からリカルドの人生を再構成していく。

飛行機事故死したリカルドの妻エレーンはジョン・F・ケネディが提唱した平和部隊によって農業指導のためにコロンビアにやってきた。そこで2軒目に下宿した家の息子がリカルドだった。ふたりは恋仲になり、結婚。リカルドは祖父の血を受けついでパイロットになる。妙に羽振りの良くなったリカルドはエレーンに土地を買い、家を建ててやったりするのだが、実はそれが麻薬密売で儲けた金だったと知ることになる。あろうことか、平和部隊の仲間たちが麻薬の栽培と密売に一枚噛んでいるらしいのだ。それこそパブロ・エスコバルと彼のメデジン・カルテルなどを真っ向から扱うのではなく、エスコバルとは異なった道を進んだ人物を造型し、しかも麻薬戦争の始まりの地点と合衆国政府の政策（平和部隊）を関係づけ、鮮やかな印象を残す小説だ。

リカルドはパイロットであり、農業を指導し、農民とも通じている平和部隊のアメリカ人たちと知り合いであったから、どこのカルテルにも属さず、いわば仲間内のグループだけで密輸に乗り出すことができたのだろう。最終的には検挙され、収監されることによって彼は麻薬運搬の仕事から足を洗うことになるのだが、自らのセスナを駆って旅をしていたのだから、国境を越えるのに苦労は要らなかった。リカルドが妻に語り、アントニオが知るようになったリカルドの仕事とは、概要、以下のようなものだ。

密売は飛行機で行われる。まず、カリブ海で孤独に苛まれ、キューバでは米機と間違えられないよう注意深く迂回し、ある種の懐かしさとともにバハマのナッソーに降り立つ（「管制官たちは見て見ぬ振りをする（彼らの視力と記憶力は、何千ドルかのおかげで修正される）」）。そこでシヴォレーのピックアップトラックに乗せられ、とあるホテルに行く。常に金曜日のことだ。そこで怪しまれないように2日間過ごした後、週末を過ごし帰途に就く金持ちのふりをしてマイアミ方面に向かって飛び立つ。途中で向きを変えミシシッピ川のあたりに行き、麻薬を金に換え、コロンビアに戻る〔194〕。

以上が、アントニオが解明することのできたリカルド・ラベルデの密輸の方法、つまりは国境の越え方だ。マイアミから方向転換して向かった先は、伝聞に伝聞を重ねて知り得たことなので、つまびらかにはされない。いずれにしろ、管制官に金を握らせることで支障なく密航する保証を得て、自らの飛行機で楽々と国境を渡ってみせるということだ。入国審査もビザも要らない。代償は、数年の監獄暮らし。

おわりに

ここに紹介したものだけが近年のラテンアメリカ文学における国境越えの旅を描いた例ではないだろう。だが、不法移民と密輸という、市場ブロック化の時代の裏面を、国境越えのエピソードで伝える小説（や小説以外の書物）が、こうして存在していることには留意していただろう。清水によるフアニートの証言によれば、砂漠越えの辛い瞬間をポジェーロから支給されたコカインで乗り切ったこともあったという。密輸品の薬物と不法移民の労働力がこうして互いに他を呑み込みあいながら、今や国境など無関係となった商品の数々の裏で、相変わらず厳然として存在する国境をすり抜けていく。裏面としてしか顕在化しない法と国境線の存在を知らしめるフィクションは、これから先も産出されるのだろうか？

参考文献

- Fuguet, Alberto, 2011: *Missing (una investigación)*, (Madrid: Santillana)
- Fuguet, Alberto y Sergio Gómez, 1996: "Presentación del país McOndo" en Fuguet y Gómez eds., *McOndo* (Barcelona, Mondadori), pp. 9-18.
- カプラン、カレン 2003: 『移動の時代』村山淳彦訳（未来社）
- クライン、ナオミ 2011: 『ショック・ドクトリン——惨事便乗型資本主義の正体を暴く』上下巻、幾島幸子・村上由見子訳（岩波書店）

- 清水透 2013: 「砂漠を越えたマヤの民——揺らぐコロニアル・フロンティア」 増谷英樹、富永智津子、清水透 『21世紀の歴史学の創造6 オルタナティヴの歴史学』 (有志社)、201-290 ページ。
- 中山智香子 2013: 『経済ジェノサイド——フリードマンと世界経済の半世紀』 (平凡社新書)
- フランコ、ホルヘ 2012: 『パライス・トラベル』 田村さと子訳 (河出書房新社)
- ボサス、リカルド／清水透 1984: 『コーラを聖なる水に変えた人々——メキシコ・インディオの証言』 (現代企画室)
- Vásquez, Juan Gabriel, 2011: *El ruido de las cosas al caer* (Madrid, Santillana)

How To Cross the Border

YANAGIHARA Takaatsu

In this survey research I describe the way by which, in recent books, both fiction and nonfiction, people cross the US-Mexican border. This survey, I hope, will be the first step for further research on the function of displacement as a metaphor for the contemporary times. If exile has been functioning in literature as a kind of trope figuring modernity, will various travels described in recent literary works be taken as representations of the world today (let's say globalized days)? This is my starting point.

Three literary works as well as one scholarly work on Mexican history are discussed here. The first book examined is *Missing*, a novel by Chilean writer Alberto Fuguet (2011). The protagonist- narrator Fuguet looks for his uncle lost (*desaparecido*) somewhere in the USA in the late 1980s. The novel can be read as a displacement (or a disarticulation) of Costa-Gavras' film whose title the novel borrows. But as for the displacement (that is, travel across the border) of people there is nothing to point out. Carlos Fuguet, the missing, went from Chile to the USA without any difficulty.

In contrast, Marlon, protagonist of Jorge Franco's novel *Paraíso Travel* (2002), had a lot of trouble in traveling all the way from Columbia to the USA. And hardships he suffered in crossing the desert spread over the borderlands is much like those borne by Mexican "indios" reported by Shimizu in his ethnographic research.

The case of Ricardo Laverde, in Juan Gabriel Vásquez' novel *El ruido de las cosas al caer* (2011), concerns smuggling of drugs. Ricardo is a pilot and he transports drugs from Columbia to America by his own airplane. With a bribe to the controllers at the airport, his travel is safe. But once arrested, some years in prison await him.